

教 仏 名 聞

第11号
(発行日)

2011年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○〈念仏座談会〉毎月2日と12日。午後3時始。

○〈聖典学習会〉毎月6日午後7時始。

○〈真宗入門講座〉毎月18日午後6時30分始。

*8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

死 後 は 今 の 問 題

先月あるご縁でN寺に行つた。本堂の片隅に置いてあつた小冊子をめくると「Q&A」という欄があつて、「私は死んだらどうなるのですか」という質問があり、その答えに「経験できない死後の問題を悩むより、先決問題である「自分が今、何をすべきか」が大事です」と書かれてありました。

また私の知人のAさんがある浄土教の学者に「私は死んだらどうなるのですか」と問うたのに対して、「分からぬ死後を問題にするより今、阿弥陀仏に生かされていることに目覚めなさい」との答えがかえってきた、とAさんより聞きました。

こうした答えで言おうときれていることはよく分かります。ただその場合、たとえば「死後のことよりも今何をすべきかを課題にせよ」と言われても、さて私たちは今あら

ためて何ができ、はたしてまたどんな生き方ができるのでしょうか。課題はいくつも考

えることはできませんが、しかしいろいろな課題に応じた生き方がそう簡単にできるのでしようか。

老年にもなると、今さら自分の行いや生き方を改めたり変えたりするようなことはできず、今まで生きてきたようにしか生きられないというのがいつわらざる実感ではないでしようか。

真宗では「宿業の身」と教えられていますが、めいめいの人がどういう生き方をするかは一人ひとりの持ち合わせの宿業に深く影響されています。それぞれが過去の業(行い)に縛られ、自分の生き様

を変えることが非常に難しいことは、あえて検討するまでもなく、身にしみて感じていることではないでしようか。

こうした宿業の身にとつて、「死後のことよりも今何をすべきかを課題にせよ」

と言われても、頭ではうなずけても特別な善いこととか理想的なことが今容易にできるわけでもなく、相も変わらぬ生き方しかできないのが多くの場合の現実ではないでしようか。

そして現在の生き方は毎日が相も変わらなず似たりよつたりであつても、人は確実に死につつあることは間違いないことです。「生は偶然であり、死は必然である」といわれています。私の生き様は今後もそんなに変わらなくても、私の生は

ほとんど終わっていきます。しかも死んでどうなるかは不明のままであり、そこに大きな不安を感じざるをえません。それゆえ「私は死んでどうなるのか」という不安は死ぬ時の問題ではなく、現在がかえっている大きなストレスではないでしようか。死と死

後への不安は決して未来ではなく、それこそただ今の問題として迫ってきているので

す。『ウダーナヴァルガ』という

「大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の奥深い

ところに入っても、およそ世界のどこにいても、死の脅威のない場所は無い。

ひとびとのいのちは昼夜に過ぎ去り、ますます減って行く。水の少ない所にいる魚のように」

と説かれています。現在をどう生きるかという課題が大事なことはよく分かりますが、老いの身にとつては、ほどなく確実におとづれる死と死後の問題がさらに重要な現在の問題だともいえるのです。

また「分からぬ死後を問題にするより、現在阿弥陀仏に生かされていることに目覚めなさい」との答えもよく耳に

します。ところがさて、「現在、阿弥陀仏に生かされていることに目覚めることができるか」というと、これがまた大きな壁にぶつかってしまします。

一般に「今日も無事で生活できたのは阿弥陀様のお陰」というようなのは、健康が保たれて生計もなんとかやれているという自分の都合のいい状態を「阿弥陀様のお陰」と

か「阿弥陀様に生かされている、有難い」と受けとつてい

正信偈に学ぶ問答

(三十一)

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

このことは何度も聞かねばならない点です。如来様に目がかかず、いつまでも自分の方の心のあり方とか生活の姿とか、自覚のあるなしとかにのみこだわるのは、裏から言うとか如来様の弘誓の御恩を軽く考えているからです」

N「阿弥陀様は極めて積極的
に私たちを救おうと働きかけておられ、その恵みによって救われる値打ちのない私たちが
お助けにあずかることができ
るのですね。そうであれば
如来様の御恩を忘れることは
できないはずです」

D「ええ、そこで、それほど
の御恩をいただいた私たちが
は、仏のご恩にどう応えてい
けばいいのか、ということに
なりますね」

N「親の恩に対しては、親孝
行をするということで、親の
経済生活を援助するとか、生
活介助をするなどが勧められ
ていますが、阿弥陀仏の御恩
にはどうすれば報いることが
できるのか分かりませんし、

そもそも仏様の御恩に報いる
ことなどできるのかという疑
問もあります」

D「そうなんです。仏様に
お助けいただいた広大な御恩
にどうお応えするか。それを
考えても、どうしていいか分
かりませんし、また報恩など
というものがとてもできそう
もありませんね」

N「ではどうしたらいいので
しょうか」

D「ところが、そのことまで
すでに阿弥陀様や諸仏善知識
様がちゃんと配慮して下さっ
ているのです」

N「どう配慮して下さってい
るのですか」

D「それがここでいわれるへ
唯能常称如来号 応報大悲弘
誓恩」ということです。すな
わちただ能くお念仏を申しな
さいとお勧めになり、お念仏
を申すことが如来様の御恩に
報いていることになるのだ
と」

N「お念仏申すことはやさし
いことですが、これがなぜ仏
恩に報いることになるのです
か」

(書き下し) ただよく、常に
如来の号を称して、大悲弘誓
の恩を報ずべし、といえり。
(現代語訳) 「ただ常に阿弥陀
仏の名号を称え、本願の大
いなる慈悲の恩に報いるがよ
い」と述べられた。

*
N「ここはどういうお心をお
示しなのでしょうか」
D「私たちは阿弥陀如来様の
かたじけなき広大な御恩によ
って救われるのであり、この
御恩をいただいた人は南無阿
弥陀仏の御名を常に称えて仏
の御恩に報いるがよい、との
お勧めであります」
N「如来様の御恩というのは
それほど大事なのですか」
D「ええ、私たちが救われる
のは全面的に如来様の大悲の
お力によってであって、私の
側の行いとか心がけとか人間
性の善し悪しによりません。

こういうように現在の私の
生き方や行いを自由に改め得
ることもできねば、かといっ
て「現在、自分の存在が阿弥
陀仏に支えられている」とい
うような目覚めもできない、
無知無能な私。しかも「私は
死んだらどうなるのか」とい
う不安をまぎらすこともでき
ない私。

そういう無知無能な私に阿
弥陀仏は「汝の苦しみはずで
に私が知り抜いている。かな
らず我が浄土に生まれさせる
から、我が名を称えるばかり
でよい」と仰せ下さっていま
す。何も分からず、どうする
こともできない私に「そのま
まなりで引き受ける。念仏申
せ」との大慈大悲の仰せ。私
どもにとつてはこの大悲の本
願の御言葉に順って念仏申す
道のみが残されているのでは
ないでしょうか。

この大慈大悲の仏心をいた
だいていくところに、「自分
は今、何をすべきか」は、
悪をつつしみ善に向かいたい
という自然な情にもよおされ
ての生活が、ほそぼそながら
であつても、為されてくるの
であります。

場合がほとんどです。しか
し、こうした信仰は自分が病
気になったり、死の病の床に
着くようになる壊れてしま
う信仰ではないでしょうか。
大病して死が目前にせまつて
きた時に、「生かせてくれて
阿弥陀様有難う」などといえ
るかどうか、怪しいものです。
この事は以前にも書いたの
で繰り返しません、こうい
う自分の都合のよい状態を
「阿弥陀様のお陰で生かされ
ている」といつているような
信心は、真宗の信心ではあり
ません。
では「私は阿弥陀様によつ
て生かされている」とはどこ
で言えることなのでしょう
か。それは清沢満之先生が「
絶対無限の妙用に乗託し
て」いる自己とか、あるいは
「我等は絶対的に他力の
掌中にあるものなり」とい
うような、自己存在が絶対無
限ないのちに支えられている
との目覚めをいうのでありま
しょう。いわば「阿弥陀仏が
私の存在の主体だ」というよ
うな自覚でありましょうが、
こういう事実 directly 目覚め
ることは非常に難しいのでは
ないでしょうか。

(了)

ができようはずがありません。それにもかかわらず阿弥陀仏は、お念仏を申すことは仏の御恩に報恩感謝することになるのだと仰せられるのです。いわば阿弥陀様は私たちが称えるお念仏をそのまま阿弥陀仏への報謝と受けとつて下さるのであります」

N 「阿弥陀様からいただいたお念仏にもかかわらず、称えることでもって私たちが阿弥陀仏に感謝し、仏恩に報いていることと受けとつて下さるのですね」

D 「ええ、そうです。そこを念仏者の松並松五郎さんは

嫁に行った娘に、親がお祭りのご馳走を持って行った。田舎のことゆえ、これというご馳走はないので、親が持つて来たご馳走を出して「おあがり」と言えば、親は「頂きます」と言うてよばれた。親から頂いた南無阿弥陀仏、頂くまま御礼報謝に受け取つて下さる、そなわるとは。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、たとえて教えて下さつてます」

N 「本当に至れり尽くせりの御恩ですね。ではどうして仏恩報謝の行として「ただよく

念仏を称えよ」と仰せられるのでしようか」

D 「その深い理由は容易に伺えませんが、聖人が『尊号真像銘文』に、お念仏申すことは一切の生きとし生けるものに南無阿弥陀仏の功德を自ずから与える働きをしているのだと仰せられています。これは非常に注意すべき点ですし、大変に有難いことです」

N 「南無阿弥陀仏を称えていくことが、人々に南無阿弥陀仏が与えられていき、南無阿弥陀仏がおのずと伝わっていることになるのですね」

D 「三河にNさんという厚信の念仏者がおられました。彼女が長く入院したとき、入院中もお念仏を喜んでおられました。それがいつの間にか周りの患者さんに影響を与えて、幾人かの人たちがお念仏を喜ぶようになりました。これなどはよい実例ですね。また信心の利益に現生十種の益というのがあり、その中に

常 行大悲の益

というのがあります。お念仏をいただいた人は常に他を救う慈悲を行っていることになり利益が与えられる、と聖人はみておられます。お念仏を

信じ、お念仏を申している人は南無阿弥陀仏の恵みを他に与えているという慈悲の行いをしていこうという利益が自然と具わる、のだと仰せられるのでしよう」

N 「南無阿弥陀仏を信じ称えようと、それが自ずから世界に伝わっていくということは不思議なことですね」

D 「そう思います。それは称える人の能力というのではなくて、南無阿弥陀仏という真実の言語そのものが、そういうはたらきをもっているといえましよう。真実の言葉は、人々の心に共鳴し、伝わっていく力があるのだと思えます。実際、人は結局何を求めているかというと最後は「真実の言葉」すなわち「人生の真のより処となり死して帰る処を直接示すような言葉」を求めていると思えます。それはほとんど本人には自覚されていませんが」

N 「ですから人は南無阿弥陀仏の言葉に共鳴するのですね」

D 「ええ、そう思います。ただし、逆に反発する人もいて、南無阿弥陀仏を誹謗する人もあるのだ、と釈尊はそのこと

もすでお説きになつていま

す」

N 「南無阿弥陀仏に抵抗する人もいるのですね」

D 「ええ、しかし反発するということは南無阿弥陀仏の威力の真实性を逆に示していると言えましよう。誹謗するということ形でその人は感化を自然に受けているといえます」

N 「今日、浄土真宗がふるいませませんが、それはお念仏を信じて常に能くお念仏を申す人が少なくなつたからといえないでしようか」

D 「そう思います。今度の宗祖親鸞聖人の七五〇回忌法要で東本願寺の御影堂の中にもお念仏の声はわずかしか聞こえませんでした。これはお念仏を信じ、お念仏を喜ぶ人が少なくなつたのだと言えましよう。今日の浄土真宗の現状が端的に表れていると思えます」

N 「ということはお念仏が人々に行きわたつていかないということですね」

D 「ええそうなんです。お念仏が有難ければ自ずからお念仏はどこでも申されます。お念仏が有難いものになつていないから、口に出てきません。信心があれば必ずお念仏は申

されてきます。そこを聖人は真実の信心は必ず名号を具す。

と仰せられています」

N 「ただ、信心のある人でもお念仏を余り申さない人がいますね。それはどうなんでしょうか」

D 「それについて、聖人はお手紙に

信心ありとも、名号をとなえざらんは、詮なくそうろう。と仰せられています。詮とは詮表といふことで、表に現れるということですが、信心があつてもお念仏を申さなければお念仏の功德が外に現れ出ていけません。それゆえ人々にお念仏が伝わっていないという思い召してはいけません。ですから信心のある人は積極的によくお念仏を申してほしいと願つておられるのでしよう」

N 「ですから、信心の人は「ただ能く常に如来の御名を称えて大悲弘誓の恩を報ずべき」なのでですね」

D 「ええそうです。こういうにいる私自身、お念仏をしようちゅう忘れていきますので、おはずかしいことです」

信心夜話

『一蓮院談合録より』(へ7)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

当流は我心と仲たがいでして仏の慈悲ばかりをたのむべきなり。世間にて兄弟たりとも或いは近隣の人なりとも、初めより仲はたがわねども、先方の人より不実のこと度かさなれば、余儀なく仲たがいでして、唯実意の人と懇意にするなり。

我心も始めよりは見捨てねども、思い定めても定まらず、喜びても喜びの心もつづかず、潔よき心と喜びしあとよりも雲霧がかかりて、いかにもたのみがいなき我心なれば、もはやこれきり我が心に仲たがいでして、唯如来の御真実のみをたのみまひらするようになるなり。

(真宗の信心とは自分の心を見限り、阿弥陀仏の大悲のお心をたのみにすることであるといえる。ただ私たちは自分の心をたのみにする心が強くて、なかなか自分の心にあいそをつかせないのである。私は最初、自分の友に対するねたみ心が非常に気になってなんとか広い心になりたいと願って宗教を求めようになつたが、ねたみそねむ心は取れないので困ってしまった。その後、外の世界と内心との間のうつつという分離意識が一日中続

くようになり、なれどもいえない憂い心の日々が続いたが、これもどうすることもできな

は、なんとか真実が分かりたい、信心を得たい、ハッキリしたいとのみを願うようになったが、信じることもできず、阿弥陀仏のお助けをハッキリすることもできず、これにはほとほと困ってしまったのであった。そればかりではない、何とか地獄一定の身であると自覚したい、助からぬ身であると実感したい、とまでも願うようになるが、これもいつまでたってもそうは思えなくて困つたのである。こんな状態が長く続いたが、今から思うと、これみな自分の心に見限りがつかず、念仏称えたら何とかなる、聞法を続けていけばいつかはわかるようになる、自分の心にまだ期待をし続けていたのである。自分で自分の心を見限ろうとする

こと、そのことがやはりまだ自分の心をあてにしているのであった。ところがなんとまあ、称えていた南無阿弥陀仏は「そんなお前の心だから、私がまるまるひき受けるのじゃあないか」「ワレヲタノメ」と、私がおもいわずらう前にすでに南無阿弥陀仏様は仰せ下さつていたのであった。その仏心大悲が知られて、まったく今まで何を聞いていたのかと驚くやらもうしわけないやらで、阿弥陀様ばかりをたのませていただくことになった。実に単純、こんなに簡単で有難いことはないとなった。

それでもなお、喜びの薄いことや、何

ともないような心が気になって、そこが目がいき、はてさてこれでいいのかなどという思いが起る。ところが、これがまた自分の心を見限つておりながら自分の心を当てにする自力の思いである。こういうことが何度もあるが、そのつど「阿弥陀さまばかり」に帰らしていただく。自力の思いはこの世の人生が終わるまでなくならないであろうが、自力の思いが逆に弥陀他力の有難さを知らしてくる。自力の思いはいかほど強くあろうとも、弥陀大悲のお力の前ではまったく無力である。弥陀のお助けをさまたげることはできない。むしろ弥陀のお助けでなければならぬことがますます知らされる。自力の思いも、自力の思いばかりの時と本願他力を知つたあとの自力の思いとがある。

雲溪師いわく。私のたのみようや信じようは下手でも、助けてくださる方が上手なり。唯助かりさえすれば本望なり。今日より阿弥陀仏のまことをたのみたてまつりて弥陀に助けらるべしと気のつきたるも我が力かは。

(私のたのみようや信じようは下手どころか、いつもスカタン。阿弥陀様は私の信じようやたのみようはちりほどもあてにしてはおられない。私を助けることは阿弥陀様の方で法蔵菩薩となつて本願を起し、ながながと御修行して下さい、その結果、まるまる助ける阿弥陀仏となられて、いま南無阿弥陀仏として私に(助ける)(引き受ける)と喚んで下さって

いる。この阿弥陀様の御恩を聞かせていただいでこそ、我が力ではとても自分助からぬのであつたと知れる。釈尊が阿弥陀仏の御苦勞を説いて下さつて、善知識様よりそれをお聞かせをいただかなくては、我が身にどれほどの大悲がかけられていくかが知られない。助け上手の阿弥陀仏に助けられるのには用意もなにもいらぬのである。ただ助けていただくほかはない。)

〔出講予定〕
*九月三日。了泉寺・午前と午後
*九月二十七日・二十八日。大阪難波別院・午後一時半

《孟蘭盆会法要》

八月十日 (水)

午後2時始まり

《八月のお休み》

*毎月十二日の念仏座談会と毎月十八日の真宗入門講座は八月は休みです。
*二十二日の同朋会も例年通り休みです。